

## 「地域再生・就労創出」7.24 集会

—働く人びと・市民主体の21世紀型ワークシステムをめざして—

# リレートーク

地域に必要とされて  
いるから



梅村敏幸さん  
(中央労働金庫労働  
組合執行委員長)

ILOの総会へ行って、貧富の差の拡大・失業の深刻さに驚いた。世界総人口60億人の約半分の30億人が1日2ドル以下の生活をしている。その人たちに必要なのは、地域に根ざした仕事。しかし、そうした働き方は、企業にはなじまない。

地域に必要とされているから仕事をおこす、その重要性を各国の人が発言していた。

若い人たちの失業も深刻で社会不安が増大している。だから、雇用機会の創出が協同組合に期待されている。労協はそれに挑戦しているのだと思う。

日本がどうあるべきかという論議をしていくきっかけを協同組合が作り、いずれ、みなさんと一緒に同じ目的にむかって仕事をすすめていきたいと思う。

青年が働き方を学ぶ場  
づくり



藤井智さん  
(NPO文化学習協同  
ネットワーク)

不登校だったMちゃんの話をしたい。インターンシップでパン屋さんにいったら、「お前、なかなかやる気があるからアルバイトしてみろ」といわれた。不登校ですごい自信がない。「お前よう、失敗してもいいから思い切ってやってみろ。失敗するやつは何かやっているから失敗するんだよ。何かやっているお前で居た方がいいだろ。責任は俺が負うからやってみろ」といわれて、吹っ切れたみたいで定時制高校を卒業するまでそこでアルバイトした。失敗するのが悪いのではなく、失敗からなにも学ばないのが悪いということ。

わたしたちも、「コミュニティペーカリー・風のすみか」を開設することにし、3つのメッセージを出している。

・全体像が見え、対等な立場で参加するため

話し合いを徹底する。

- ・失敗してもいい。でも失敗したら、そこから学ぼう。
  - ・市民としての作法を身につけよう。
- 職場というより、働き方の「学びの場」だ。ここを通じて、社会にでていく、そういう職場をつくりたい。

## 自治体との提携で 仕事おこしを



高成田健さん  
(労協センター事業  
団東関東事業本部)

自治体との提携について。先日も地域福祉計画を作成している県の担当課からコミュニティビジネスの実態がわからないのでと問い合わせがあり、埼玉・深谷のだんらんを紹介した。担当者からは「高齢者の生活実態とニーズに合わせて仕事を作っているのが素晴らしい」と評価された。

介護予防の仕事も広がっている。和光市では介護予防食の研修事業を提案し受託した。高齢者の食事の面から介護予防に取り組む。他市でも、仕事おこしにつなげていく視点を入れた職業訓練も受託し、小規模多機能セミナーもやることになった。

大学との提携は、インターンシップや、大学と共催したヘルパー講座、コミュニティビジネス講座も提案している。

## 緑化事業の若手も 木に登れない



高木哲次さん  
(伊丹労働者協同組  
合)

緑化事業で若手を育成しているが、びっくりしたのは都心部では木にのぼれない若手が多いということ。

子ども達を健全に育てようと、教育委員会の子育て推進委員会のアドバイザーになり、「けがをなおせる体力、けがをなおす気力」を重視していこうと話している。

予算がないからと、市役所は草ぼうぼう。必要などころに必要な予算を、安くできるところは安くいこうと話し合い、予算内容もオープンにしていこうとしている。

やってみると、予算より少なくなることもある。枝の切り方も、切れれば切るほど枝が伸びるので業者も毎年仕事がある。自然に延びるように切り方を工夫すれば予算を減らすことができる。そのことが評価されている。

## 進路で地域調査する 高校生も



平本哲男さん  
(労協センター事業  
団神奈川事業本部)

自治体への企画提案は“連戦連敗”だが、自治体も変わりはじめていることを実感する。昔だったら「何しに来た」という態度をされたが、今は労協新聞をもっていくと、どこでも真剣に話を聞いてくれる。担当者が他の部署に「ゆっくり話を聞いてやってほしい」と連絡してくれるところも出てきた。

小田原の高校を訪ねたら、高校生が地域に調査へ行って進路の参考にしていた。口先だけでなく、もっと広い視野から協力関係をつくりたいといわれた。

横浜市の紹介で200坪の畑をやっている。高齢者の農業を支援する組織もある。我々が畑をやっていると必ず高齢者が見に来る。うれしそうに。社会連帯委員会というのはこういうことかなと学んだ。